太平洋戦争から76年 戦争経験者の声

清水立義さん(95) 陸特攻の訓練を経験

千西一週

第83号
発行
2021年
9月10日(金)
上田西高校
新聞委員会
編集局

編集局長:堀内日菜子
新聞委員長:橋爪ここ菜

藤田　珠寿
林　　優衣

NHKがテレビ放送している#あちこちのすずさんプロジェクト@上田が行われ、編集局員3名が参加した。7月17日に清水立義さんに7月30日（木）に塩崎武彦さんにそれぞれ戦時中の話を聞いた。清水さんは実際に蛸壺豪に爆弾を持って入り、陸特攻の訓練をした経験がある。また、塩崎さんには旧上田飛行場が空襲された時の様子や建設が進められていた半地下工場の労働者の生活、また当時の暮らしについて話を聞いた。

自身の戦争体験について語る清水立義さん

戦火の中での学校生活

清水さんは、太平洋戦争の戦火のなか小学校時代を過ごした。しかし清水さんの学生生活は現代の我々が送っているような生活とは程遠いものだった。戦争が進むにつれ学習のための授業時間が減り、軍国教育や勤労奉仕などの授業に変わってしまった。清水さんは「当時は英語の授業があったが、太平洋戦争の影響を受け中止になってしまった」と話す。絶対に戦に勝たなければならないという信念を学校教育によって植え付けられた清水さんは、「お国のためになろうと意気込んでいたため、厳しい軍事練習や勤労奉仕にも苦痛を感じなくなっていた。あの時は異常だった」と当時を振り返った。

「戦時中は友達とどんな遊びをしていたか」という質問をしてみた。「遊びなんてしている場合ではなかった。休み時間の友達との話題は、どうやったら敵国を打ち破ってお国のために活躍できるかということだった」と清水さん。当時の小学生にとっても、日常生活の中に「戦争」があったことが伺えた。

当時小学生だった清水さんの家は精米所を営んでいたが、父親に先立たれ、多くの子を抱えた母親1人では困難だったため、学校を辞めて家業を手伝うことになった。

（堀内日菜子）

清水立義さん（９５）

大正１５年７月４日に小県郡傍陽村（現在の上田市真田町傍陽）に７人兄弟の長男として生まれる。家は村で１つしかない精米所を営み、雑穀を加工して販売する仕事もしていた。１７歳の時、父親が４７歳の若さで亡くなる。その年の１２月に通っていた学校を辞め、母を手伝うため家業を継いだ。太平洋戦争も終盤に近い昭和２０年７月に当時の陸軍に入隊。配属先は静岡県の三島。２日後に二宮に移る。

命懸けの訓練 全ては国のために

清水さんは昭和20年の徴兵検査で合格し、7月に陸軍に入隊した。国の為になってよかったと思ったが、当時の教育の結果、そういう思考になったので、教育の力は本当に大きいものだと話してくれた。その月の20日に静岡県の部隊入隊した。服装は支給されたが、兵隊なのに銃や帯剣はなく、全くの丸腰だった。2日後に神奈川県の部隊に移り、終戦までの1ヵ月近くを過ごした。終戦までの毎日は砂浜に蛸壺と言う1人用の塹壕を掘って隠れ、砂浜に敵や戦車が上陸してきたら7kgの爆薬を背負って、戦車の下に潜り込み、破壊するという訓練を繰り返していた。上陸してくる戦車を1人1台ずつ担当した。戦車は視野が狭い上に周りよりも低度が弱いので下に潜り込んで爆破するという、兵士の命を全く無視する戦法だった。まさに肉弾戦そのもので、自らの命に変えて敵戦車に体当たりするという、今にして思えば戦法と呼ぶには値しないのではないかと思う戦い方だったと話してくれた。岡本喜八監督の映画「肉弾」にはこの様子が描かれており、昼間は訓練夜は軍事教育の毎日だったと言う。

（藤田　珠寿）

清水さんに支給された軍隊手帳（写真右）

終戦後に語る平和への思い

76年前の8月15日の夜、清水さんは終戦を知った。国に命を捧げることは当たり前だと信じて疑ってもいなかった清水さんは「放心状態になってしまった」と話す。後日、岡山原部隊が移動すると、そこには驚いたことに軍事物資の弾薬や兵器、食料や衣料が山のようにあり、なぜこれで戦に負けたのかと思ったそうだ。

現地での仕事は空襲を受けた建物の片付けが中心であった。食事もガラッと変わって、今までは高粱（コーリャンと呼ばれるとうもろこしの一種）の雑炊だったものが、白い麦ご飯になった。8月30日に軍の解散式が行われ、31日に帰還許可が出て、服装一式と毛布一枚をもらい、9月1日に岡山を出発し、9月3日夕方に実家に到着した。家に帰ってきたことを家族はとても喜んだが、自身は国のために命を捧げるつもりだったため、虚脱状態になってしまった。その後清水さんは、前の職場の上司の支えもあり、仕事を再開したが、食糧難という生きるための新たな戦争が待っていたと話した。

清水さんは、「あの戦争を経験した一人として、この先の日本が心配でならない。戦争は私たちの生活の全てを奪うもので、絶対にしてはいけないものだ。若い皆さんが再び戦争の道を歩むことがないようにしてほしい。戦争が2度と起きないよう、戦後約70年というこの時に心の底から祈っている」と話してくれた。

戦争体験者の高齢化が進んでいる今だからこそ、戦争の実態を音声や映像に記録し、次の世代、特に若い世代が戦争を話し、伝えていくことが重要である。

（藤田　珠寿）

塩崎武彦さん(82) 上田で米軍の戦闘機を目撃

自身の戦争体験について語る塩崎武彦さん

塩崎武彦さん（８２）

小学２年生の夏休みに、迎え盆の天ぷらを揚げるため祖父と２人で野菜をとりに行った際に、普段聞き慣れない唸るような音と共に、２軍に分かれた５、６機の戦闘機を見つる。素晴らしい飛行機だったので、これなら日本はアメリカに勝てるなと思ったが、それはアメリカ軍の戦闘機だった。その機体は別所の方に行った後、引き返して真っ直ぐに旧上田飛行場（現在の上田千曲高校）の方に向かった。その後、ものすごい勢いで旧上田飛行場が爆撃されるのを目撃した。

太平洋戦争末期の昭和20年５月に名古屋市にあった三菱重工業の航空機工場が空襲で全滅した。これを受けて日本軍は、本土での決戦に備え航空機工場を上田周辺に集結させる計画を立てた。同年六月から仁古田・東塩田・川辺の３地区の丘陵地にエンジン部品組み立て、飛行機製造の半地下工場の建設が行われ、軍用道路が整備された。この工事の呼称を上田市の「ウ」を取り、軍隊では「秘密のウ工事」と言っており、その工事には数百人の労働者と日本の兵隊が従事した。

塩崎さんは、当時工事に従事していた人々の生活について「当時労働者３００人がお風呂に入る際は、ドラム缶に水を溜めて湯を沸かしながら交代で入っていた。重いつるはしやスコップを持って作業していて疲れていた労働者たちも休まる時間がなかった」と話す。工事規模は、半地下工場が約１５００坪。その他の倉庫、事務所、宿舎を合わせ約７０００坪と広大な計画であった。しかし、この工事も着手まもなく終戦となり、工事が進まないまま引き上げた。（堀内日菜子）

上田に残る戦争遺跡

地域歴史資料館

―――――――――――

上田の経験した戦争の痕跡をたどることができる川辺泉田

戦時を乗り越えた生活の知恵

当時の食糧事情について「当たり前が当たり前ではなくなり苦しい生活を強いられた」と塩崎さんは振り返った。戦争中から終戦後にかけて物資不足に伴い配給制度が長年続いた。中でも白米は正月やお盆にしか食卓に並ばない貴重なものであったため食事は麦やじゃがいものみであったという。学校には「米に大豆を混ぜてかさましをし、その上におかずの代わりの梅干をのせただけのいわゆる日の丸弁当を持って行っていた」と話した。毎日中身が同じだったため、お弁当箱の蓋には梅干しの酸で穴が開いてしまったそうだ。

また、当時は家計も苦しく、学校にお弁当を持参できない生徒や修学旅行に行くことが難しい生徒も多かった。子供たちはちょっとしたお小遣い稼ぎにと衣類に使われる長い毛が特徴であったアンゴラウサギを何羽も育てて毛をお金に換えたり、さらにはアメリカの飛行機が落としていった薬莢という銃弾の一部が非常に高く売れたそうで、田んぼに入って必死に拾い集めたりしていたと塩崎さんは当時の暮らしを振り返った。また最後に「戦争は失うだけで得することは何もない。経済がどうであれ、戦争は絶対にやらない、起こさないという気持ちを持っていて欲しい」と若者に向けて語った。（林　優衣）

川辺泉田地域歴史資料館に保管されている薬莢

デジタル地図で伝える戦争

７月30日の午後、上田市海野町商店街にあるまちなかキャンパスうえだでこれまで調べた戦争のエピソードをデジタル地図strolyで記録した。

この活動はＮＨＫと全国各地の新聞社が戦時中の暮らしについて伝える「#あちこちのすずさん」というプロジェクトの一環で、この日は上田西高のほか上田染谷丘高、上田千曲高、長野大学のおよそ15人の生徒が参加し、オンラインでＮＨＫの担当者とやりとりを行った。strolyとは位置情報に表現を加えるサービスで地図上に説明やエピソードを入力したり動画やＳＮＳと連動させたりすることができる。

今回は実際に戦争を体験した清水さんと塩崎さんからお聞きした戦時中の生活の様子や当時の苦しい食糧事情などの特に印象に残った話を記録した。（林　優衣）

strolyによって記録された位置情報とその場所の説明

コラム　日常に着目し新たな視点からの戦争伝承を

これから戦争を伝承していくにあたって、戦時中の「日常」に着目した新たな視点から戦争を考えて欲しい。

高校生の多くが戦争を日本の悲しい歴史と捉えて、受験のために機械的に覚える。現に、日本の高校生の約５人に１人は「日本が戦後何年か分からない」と答えている。また、４人に１人は「また日本は戦争をすると思う」と回答したというデータも出ており、戦争に対しての意識が低下していることは否めない。私のように祖母や語り部の方から直接話を聞かない限り、自分とは関係ない単なるよそ事でしか伝わらないだろう。そして、コロナ禍や戦争体験者の高齢化が戦争の直接的・対面的な継承を困難なものにさせている。

重くて暗いイメージが強い戦争だが、その日常に注目しつつ、少しでも興味を持ってくれることを期待する。例えば戦時中の食生活・遊び・恋愛など―。今と昔に共通する話題を取り上げることで、戦争を特別なものではなく、その延長線上に自分たちが生きているということを実感できるのではないだろうか。いまを生きる若者にとって重要なことであると考える。（堀内日菜子）